世界に広がる豊かな人的ネットワーク

本研究科が持つ多様性と豊かな人的ネットワークの広がりを世界地図上にてピックアップし、本研究科の在学生・修了生による世界各地の開発フィールドでの活躍や現地に寄せる思いをご紹介します。

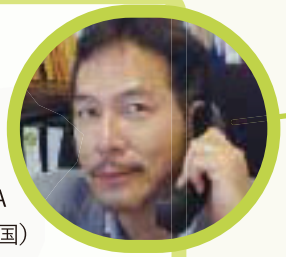
尾田 直美 [修了生]

JICA セネガル事務所　ボランティア企画調査員

現在、セネガル国における協力隊事業班全般業務（協力隊員の受け入れ先における要望調査、新規案件開拓、協力隊員の活動支援等）に従事しています。
服飾業界で働いていましたが、チュニジアにおけるボランティア活動をきっかけに、海外ボランティア人材のコーディネーターとして国際協力に貢献する仕事へと大きくキャリアチェンジしたため、開発の基礎を学びたいという思いから入学を決意しました。
論文執筆の道のりは決して平坦ではなく、2019 年には当時勤務しており研究対象でもあったスーダンで政変が起こり退避帰国となり、予定していた現地調査ができなくなりました。また退避後は勤務国が変更になるなど、本務としても研究を続ける上でも非常に苦しい状況でした。現地に行けない分、文献研究に力を入れ、主な調査対象を変更したり、email を用いるなどの工夫を行い、また、指導教員の熱心で丁寧なご指導のおかげで論文を書き上げることができました。論文執筆において得た学びは研究成果だけでなく、あきらめずにコツコツ続けることや、目の前にある壁に圧倒されても必ず乗り越えられる、という気づきを得たことです。

相園 賢治 [修了生]

Aizono and Associates Limited



通信課程を修了後、2013年にケニア・ナイロビにてビジネスコンサルタントファームの現地法人を設立し、日本政府のODA事業や日本企業のアフリカ進出支援、またアフリカ各国（20か国）の地場産業振興のお手伝いをしてきました。通信課程では様々な学びがありましたが、一番の収穫は現在も続いている修了生同士のネットワークでしょうか。
2019年より新たにアフリカスポーツ振興のプラットフォームを立ち上げてきましたが、この修了生ネットワークのおかげでワールドワイドなプラットフォームができつつあります。アフリカの開発をスポーツとビジネスの切り口で考えてみることにご関心のある方は、ぜひこのプラットフォームを盛り上げていきましょう。

新居 真梨子 [修士課程 2 年]

本学に入学した 2021 年から約 2 年間、JICA 海外協力隊として マラウイ共和国へ派遣されていました。 1 つの教室に約 7 0 人以上の児童がおり、教室には電気もなく教科書や机なども十分でない地方の小学校で、算数を教える活動を行っていました。派遣前は日本で学校の教員をしていたことから、マラウイのような環境であっても、教師主導ではなく、学習者中心の授業は可能なのか？という疑問を抱き、協力隊の参加と同時に修士課程に入学しました。インターネット環境さえあれば日本でも途上国でも学ぶことができ、私にとって大きなメリットでした。本学では国際保健や、開発と障害、地域開発など、さまざまな視点から学ぶことができます。帰国してからはまた中学校教員に戻り、日本の子どもたちと世界のことを一緒に考える授業を展開しています。今後も日本とマラウイでの経験を活かし、さらに大学院での学びを深めていきたいです。

北原 照美 [修了生]

ネパール交流市民の会
JICA 草の根技術協力事業プロジェクトマネージャー

本研究科は、モルディブのユニセフで乳幼児期発達支援プロジェクトに携わりながら学んでいました。それ以前に青年海外協力隊員でも活動していましたが、院での学びを活かして現場に臨むと、現れる現象が大きく変わることが多々あり、感動していたことを覚えています。また、つまづいたときには、教授陣や仲間にタイムリーに相談できたのも大変貴重でした。
現在はネパールの母子保健プロジェクトに携わっていますが、力を入れているのは、日本の地域にいる子どもからシニア層まで市民の方に活躍してもらう「国際協力」ならぬ「民際協力」です。「海を越えたご近所づきあい」と呼び、「援助」ではなく、日常の中で相手のことを思いあい、支え合う「“民際” 社会開発」を行っていきたいと思っています。

藤﨑 文子 [修了生]

日本赤十字社バングラデシュ代表部首席代表

南アジアにおける社会開発支援の経験を相対化したいと思い本研究科に入学しました。自ら関わったプロジェクトを修士論文に取り上げるつもりでしたが、先輩や同期の研究発表を聞き大学院ならではのテーマを選びたいと考え、自分が NGO 活動の現場で拠り所にしてきた開発支援の枠組みを先住民族の福祉という視点から検討しました。「常識」を疑い、調べ、自分の言葉で表現するという研究の醍醐味を経験できたと思います。
大学院 卒業後、在バングラデシュ日本大使館勤務を経て、現在は日本赤十字社のバングラデシュ代表部首席代表として避難民支援事業を統括しています。
本研究科は、掲示板上での講義やスクーリングなど、社会人が受講しやすいコース設計に加え、現場経験豊富な教授や多様な経歴を持つ研究生とのネットワークが大きな魅力です。現場の経験をもとに、理論的に考え新しい視野を得ることのできる貴重な機会だと思います。開発支援の現場で頑張っている人にお勧めします。

小薗 正典 [修了生]

Economic Research Institute for ASEAN and East Asia(ERIA),Policy Fellow

私が本研究科で学んでいた当時は、バンコクにある国連機関でフードバリューチェーン構築事業に携わっておりました。そこでは、頻繁にアセアン各国の事業現揚を訪れ、農家や流通業者等からお話を伺いながら事業を進めていましたが、本研究科で学んだ質的調査手法などを実際のサイトで活用しつつ、同時にその経験を研究科での学びにフィードバックしておりました。また、本研究科には特定地域開発研究という、途上国での調査を自ら計画・実施し報告書を提出することにより単位が取得できるユニークな制度がありますが、私は仕事に関連するサイトでの調査を単位取得につなげるなど、途上国での仕事と本研究科での学びの連携・相乗効果の発揮という面での本研究科の強みを大いに活用させていただきました。現在は、ジャカルタにある国際機関に勤務し、持続可能な農業・食料システムの構築や食料安全保障をテーマに、アセアン各国の大学との共同研究やその結果を踏まえた政策文書作りなどに携わっております。本研究科で修得した研究方法の基本が役立っていると実感するとともに、振り返ると、このように研究生活に身を置くきっかけとなったのは本研究科での学びであったように思います。

駒走 拓三 [修了生]

JICA マーシャル支所

マーシャル諸島共和国での勤務を終えました。2019 年末に世界で初めてウイルスが確認されて以降、徹底した水際対策を実施していたマーシャルですが、2022 年 8 月に市中感染が発見され、これまで 1 万 6 千人以上（全人口の 3 割近く）の感染者を出しました。一方で、ワクチン接種率が 8 割を超え、死者は 17 名と他国に比べてかなり低い数字に抑えられています。その要因は様々ありますが、徹底した準備が大きな理由の一つだと思います。市中感染の情報が入った際には、直ちに大統領からメッセージが発せられ、全国民に協力を呼びかけました。また、医療機関をはじめとする政府機関もしっかりと訓練されていたため、市中でのパニックは起きませんでした。マーシャルの医療体制は脆弱です。高度な医療は受ける事ができません。自身の弱点を理解し、それをカバーするために努力した結果、日本や他の先進国に比べてより良い結果を残せたのかもしれません。このように、感染症対策一つをとっても、国によって様々な考え方があり、他国から学ぶものも多いのです。国際協力の現場で働くという事は、異なる状況を理解し、考え、その環境で自分に何ができるのかを考えることだと思います。本研究科では、考える力を養う講義がたくさんありますので、ぜひ学んでみて下さい。